

新刊紹介

波岩 西洋人名辭典

龜井高孝
上野豊一郎
石野原純 編輯

本書はヘルシヤ以西のアジア、ヨーロッパ、アフリカ、オーストラリア及アメリカ大陸所謂西洋の凡てに亘り、時代はエジプトパピロニア以降現代に至るあらゆる文化的領域の人士の名をアルハベツト順に配列し、要を得て簡に、その生歿の年より事蹟著書等を記したものである。それが實在の人物でなくとも或文化の神話傳説にあるものはアダム・イヴ以降盡くあげられてゐる。そして、東洋方面に活動して、西歐では有名でない人も注意して採られてゐる事は他の文化辭典に比して特殊なる位置をもつてあらう。そして往々西洋人名の日本讀みに於て起る避けがたい不統一も、よく一定の方針に従つてまとめられてゐる。この辭典によつて、今後の知識人が一人々々で無駄に費すであらうところの實に多くの努力が救はれることは甚大である。私ばかり著者が試みられし事の見透しと、それへの資本的企てについて深い敬畏を表するものである。そして百餘名の執筆者が極めて秩序づけられた統制のもとに動かされた跡を見て、編輯者の技術に高い感謝を拂ふものである。

一度は全集ものへ、今辭典へと出版界の視點が向けられつゝ、ある最近の傾向は、知的機能が個人性より組織性へと動きつゝ、ある一つの露れである。そして、その編輯はその參加者並にその指導者の凡てに於て實に一つの技術である。知識階級が自らを技術者として示しつゝある一つの方向である。

今知識階級は思想的動向に於て、外よりも亦内よりも、その力を極めて過少評價してゐる。機關を無視したる大衆の力の過大評過と相俟つて、その動きは病的にまでも進まんとしてゐる。と云ふのは知識階級はすでに今や二重の孤立性に陥入りつゝあるかの如き感がある。一つは唯物論的思想家の凡ゆる既成或は成生されつゝある思想への機械的反撥によつて、盡されたる否定的批判にもかゝららず、何等肯定的建設が自ら企劃されないことである。「批判だけではいけない。補足しなければならぬ」と云ふ有名な言葉が守られてゐない。この方向はやがて思想的缺乏と飢渴に自らを導くのである。その論争の技術の行過ぎは自ら參加すべき大衆の組織化をも混亂と蹉跌に委する怖がある。それは或場合自慰的享樂性以外の何物でもないことすらある。又一方所謂觀念論的立場に據る人々も前者の飢渴に對しては、寧ろ胃酸過剰的な自由性と絶對的個人的孤立の中に逃避しつゝあるの感がある。共同に同一の研究に向つて相たつさへて歩むと云ふ朗かな歩みがない有ゆる研究はその研究對象が同一であればある程お互に否定的である。批評論争、或は誤譯指摘或は何か他の機會を通して、一應眞實の嚴密性擁護の姿のもとに、お互に破碎し、お互に憂鬱な日の中に沈まうとして努力する。

